

## 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：Visit Dejkumtorn (ウスイット・デッカムトーン) (タイ)
- (2) 年 齢：68 歳
- (3) 参加事業：第 2 回「東南アジア青年の船」事業 参加青年  
(1975 年度)
- (4) 職 業：Fund for Friends (FFF) 会長



### ■ 国に社会活動で貢献したいという思い

「1 万冊の本を読んでも、1 万マイルを旅することには敵わない」(百聞は一見にしかず)

東南アジア青年の船(以下「東ア船」という。)は、18 歳から 30 歳までの青年に、ASEAN 諸国と日本を旅する機会を提供しています。当時、私は 20 歳で、政治学部の大学 3 年生、そしてタイの青年仏教徒協会のボランティアグループの会長でした。1973 年 10 月に学生クーデター(血の日曜日事件)があり、大学生が政府に対してデモを行う中に、私もいました。デモに参加した人もそうでない人も共通して、学生の多くは、国をよくするために何かしたいという気持ちに溢れていました。そのため、どちらのサイドに付くという問題はあまり重要ではありませんでした。

政権交代後、国に対して政治的ではなく社会的な活動において貢献したいと思いました。青年仏教協会に加わり、日曜スクールで教える立場となり、1 年後にはそのボランティアグループの代表を務めました。お寺が協会本部でしたので、そこで 5 種類の活動を展開し、小学生で障害児などを対象とした活動をしました。子どもたちに愛のある環境、愛情を感じるような場所を与えたいと思いました。この活動はタイの青年のみで、ASEAN 諸国や日本人との交流はありませんでした。その 1 年後の 1974 年、東ア船の選考を受け、1975 年度に参加しました。

1975 年度は東ア船第 2 回にあたります。私は 1 万冊の本を読むのではなく、東ア船に応募しようと思いました。東ア船は、政府関係者と民間企業が一体となった唯一無二のプログラムであり、参加者は双方から選ばれ、プログラム終了後は友情とつながりを持ってそれぞれの組織に戻っていきます。東ア船での全ての経験は、豪華客船「にっぽん丸」による約 2 か月間の ASEAN と日本の領土を巡るクルーズ、寄港地での歓迎・送別式、ホームステイ、研究所訪問、地元の若者との交流、ディスカッションだけでなく、連帯グループのキャビンメイトや違いを生み出すイベントのための服装など、貴重な経験です。

**60 日間は全てが学びのプロセス**だったと言えます。どの活動も意義深く、一つだけ選ぶことは難しく、全てを吸収して、全てを体得して活用したという思いがあります。私のようなタイの青年、学生は、国のために何かしたい、社会的な活動がやりたいと思っても、実際どうしたらよいか分かりませんでした。それが、**東ア船を通じて何をやればよいかが見えてきました。**そして、日本政府と ASEAN 諸国の政府が協力して事業を作り上げるという形は、本当に素晴らしいと思います。ホームステイ、船上プログラム、課題別視察、全てにおいて素晴らしい運営がされ、そのことにより参加青年は多くの学びを得られています。

それまで私の日本に対する知識と言え、日本映画やテレビ番組から得たものしかありませんでした。新聞を読んでも、当時は、日本は製品を売る国、自動車、電化製品を大量に ASEAN 諸国に売って儲けている経済大国、という誤解もあったように思います。そのような一面もあるとは思いますが、**事業後はお互いの国への理解が深まり、自分たちの国をよくしたい、日本など他国から学びたい**、と思うようになりました。例えば日本は素晴らしいチームワークがあり、自分たちもそのように高め合い、ここ 40 年、日本を追いかけてきたという気持ちもあります。

東ア船の後、私はより多くの友人を持ち、より多くの経験をし、より多くのつながりを持ち、日本・ASEAN 諸国・世界についてより多くを理解し、社会や国のためにより良く活動し、より力を提供しやすくなりました。事業参加後にもつながるほどの衝撃のある事業経験で、友情は国境を越え、事業後に友人への電話一本で色々な情報や協力を得たりしました。下船後には、日本青年が遊びに来てくれたり、ASEAN 諸国の友人を訪ねてまわることもありました。マレーシアやシンガポールなど、ASEAN は国境を越えると会えますので、より近い存在にも感じました。日本を訪問できるようになったのは、もう少しお金が貯まってからです。

## ■ 東ア船のタイ版を企画、実施

私にとって東ア船は、事業運営を含め、すべてが参考になりました。そして東ア船に感動した私たちは、ASSEAY Thailand (タイ事後活動組織) において、「**タイ青年の船**」(Thai Youth Ship Program)を**発足**させました。27 年前の 1994 年が初回となります。にっぽん丸のような豪華客船を使用するお金はありませんでしたので、タイの客船「アンダーマンプリンセス」を使いました。それでも 30 年前には大変高額の 300 万パーツが必要でした。1974 年度の既参加青年で銀行家の Mr. Goanpot Asvinvichit が人脈を持っていたため予算を工面し、実現することができました。事業参加から 20 年が経過していましたが、20 年をかけて Goanpot 氏は資金を得る有力者となり、私はタイ事後活動組織の経験を積んできたからこそ、私達既参加青年二人が組むことで東ア船のタイ版を実施することに成功したのです。東ア船は ASEAN 5 か国でしたが、私たちはタイの県を北部、東部のように 5 つに分け、15 歳から 18 歳の高校生を集めました。当時 75 の県があり、2 人ずつ代表を選出したので、150 人が参加しました。私が経験した東ア船は、日本とアセアン 5 か国から 30 人ずつ選出されたので合計 180 人、よって、人数規模も似た感じになりました。事後活動組織メンバーが管理部を務め、警察に所属していた女性（故人）が管理官を務めました。東ア船のように「平等」を大切にしていたので、大学がない地域のことを配慮し、参加者は高校生に決めました。参加者は自国の北部の文化、西部の文化を学んだりします。高校生は大きな船に乗って大喜びし、船は 5 日間かけてタイランド湾を周りました。この時アセアン諸国と日本からも、参加青年を招へいしました。私は管理部の一員として参加しました。日本から参加したのは 1 名で、新野芳将さん（第 22 回東ア JPY）で、その後 SIGA にもよく参加してくれていました。

2 回目は Mr. Montri Danphaiboon、1977 年度の既参加青年です。彼は大臣経験者で、私は彼が退任した際に、事後活動組織の代表にと声をかけました。東ア船関連会議に出席することとなり、彼と日本への飛行機で同席し、「タイ青年の船」について話をしました。素晴らしい事業だから続けようと賛同してくれ、その後全国青年局（National Youth Bureau、現在は Children and Youth Department に改編）の元で 4 年間「タイ青年の船」を続けることができました。NYB はタイ政府の中で東ア船を担当するところです。トータルで 5 年間実施後、資金がなくなり事業継続はなりません。「タイ青年の船」に参加して世界が変わり、東ア船に参加した人もいます。事後活動組織（ASSEAY）の現会長である Mr. Jakraphun Thanateeranon は 15 歳で「タイ青年の船」に参加しましたが、その時の経験を大変誇りに思う、と今でも話してくれます。（彼は、アーティスト・イン・レジデンスプログラムで岐阜県美濃市にも滞在していました。）ほとんどの若者は何百ものキャンプやプログラムに参加してきましたが、今でもよく覚えていて、誇りを持って言及できるプログラムは数少ないです。ですがそのなかでも、にっぽん丸とふじ丸による東ア船は、参加青年が誇りに思っているプログラムの一つです。

“Once a PY Forever a PY”（一度参加青年を経験したら、一生参加青年である）

Absolutely, PY of SSEAYP（それはまちがいない、東ア船の参加青年）

タイには「一つの船に乗って協力する」ということわざがあります。航海の際は**お互いを助け合わない危険を乗り切れないため**、緊張感を持って友人として協力します。大きな海では、船はちっぽけな存在だからです。もちろん客船に乗る高揚感もあれば、航海して港を訪れ国々を廻るという特別感もあります。そして**国境を越えることで、国を代表して参加するという意識を持つことができます**。この事業に客船を使用するのは多額の費用がかかるように見えますが、軍事予算とは比較になりません。人々の間の相互理解を促進することが一番だと思えます。

## ■ 事後活動組織の立ち上げ

1975 年度に東ア船参加後、私は 1976 年度の参加青年の事前研修にも関わりました。彼らが事業から帰ってきた後、1974、1975、1976 年度の既参加青年による事後活動組織の結成を始めました。各回 3 人ずつ代表が集まり、委員会を作りミーティングを重ね、事後活動組織を作りました。当時は法律の関係で、団体を作ることが難しかったので、5 年後の 1981 年か 82 年に、団体として登録をすることができました。

設立当初、以下の 4 つの意図がありました。

①この事業を継続させる、自分たちでネットワークをつなぐ

どの回の青年も、一生心に残る経験ができた。参加したことを誇りに思い、何か残したいと思って、活動を起こした。

②タイ政府が次年度の事業に関われるようにサポートする

参加青年の選考に協力できるよう、友人や色々な団体に話しかけた。

③国際的に各国政府をサポートする

④メンバーが世界の青年とつながる

すでに他の事後活動組織もあったので、よいネットワークを築くことができた。

私たちは、東ア船の成果を未来の参加青年に伝え、東ア船への参加を促し、東ア船を通じて得た知識や経験を共有してきました。今では、事後活動組織の若い世代が政府と協力して、毎年度参加青年のための事前研修に参加しています。現在私の事後活動組織での役割は参与で、事業においてタイ政府をサポートするのが役割となります。既参加青年がファシリテーターとして乗船することもあります。事前研修も政府をサポートします。

毎年、ほとんどの参加年度の既参加青年は、事業参加から 5、10、15、20、25、30、35、40、45 年後と言う節目の年にお祝いをしています。私たち 1975 年度参加青年は、タイで 40 周年記念式典を行い、その後もインドネシア、フィリピン、日本、シンガポール、マレーシアで記念の集まりを持っています。数年前には東京で、管理官に満面の笑みとともに再会することができ、とても嬉しかったです。

東ア船の参加青年であることを誇りに思います。

"一度でも参加したら永遠に参加し続ける"

## ■ 非営利団体の設立と交流活動

Fund for Friends（FFF）の活動は、約 30 年前、息子が 6 歳ぐらいの時に友人が息子に 2,000 バーツをくれましたが、息子は小さくてお金の価値がわからないので、代わりに自分が活用しようと思ったことがきっかけです。当時、地方過疎地域（バンコクから 100 キロ離れたスパンブリー県）は資金が必要な場所でした。その基金を使って、貧困家庭に育った良識ある生徒 2 人に 1,000 バーツを贈呈しました。こういった活動を、もっと続けたいと考え、FFFを開始しました。1991 年に、ASSEAY 会長になり、その際に、以前障害児のサポートをしていたことをつなげ、複数の障害関係施設と連携し、ファンドを活用して障害児たちに寄付をするようになりました。当初 100 ドルから始めました。これは、経済的に

余裕のあった友人が誕生日を迎えるタイミングで、「100 ドルを誕生日のご馳走に使えば消えてしまうが、障害児の教育に使えばリターンは大きい」と持ちかけたのです。これがきっかけで、東ア船既参加青年が参加する「For Hopeful Children Project」にもなっています。今は、100 万パーツが集まり、日本からもボランティアが参加する大規模な活動になっています。



2017 年「For Hopeful Children Project」で挨拶するデッカムトーン氏

## ■ 将来の参加青年へのメッセージ

若者には、「社会に奉仕すること、東ア船ファミリーと共に奉仕すること」を伝えたいです。**人は社会から学ぶ。だから、社会のために働くことを選ぼう！**東ア船は長い歴史があり、1万人の既参加青年がいる。その先輩たちが多様な活動をしています。このサイクルが、日本政府や IYEO が作り出した成果です。**Work for our Society! Work with SSEAYP family!**

### ウイスイット・デッカムトーン氏のプロフィール

非営利団体 Fund For Friends (FFF) 会長、非営利団体 Friendship For Peace(FFP) 会長、事後活動組織 ASSEAY Thailand 顧問。FFF では 1991 年、社会的に恵まれない環境にあるタイの子供たちを対象にした青少年育成キャンプ「For Hopeful Children Project」をスタート。FFP では人的交流、友好親善によりフォーカスし、日本のヒッポファミリークラブ等と交流する。令和 2 年春の外国人叙勲受章者として、旭日双光章を受賞。